

第Ⅱ章 穀物等の生産構造の変化

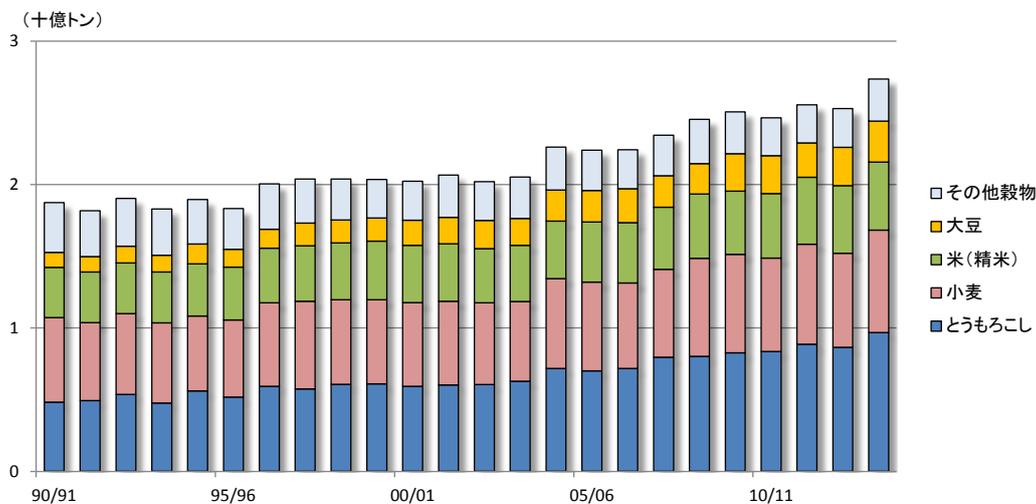
1 穀物等をめぐる生産動向

概 観

(拡大する穀物生産)

世界全体の穀物等の国際需給の動向をみると、需要面では、開発途上国の人口増加、経済発展に伴う食生活の変化、畜産物消費の増加に伴う飼料用需要の増大、近年ではバイオ燃料向け需要の増大等から、消費量は着実に増加している。一方、供給面では、生産量は主要国の農業政策の変更や天候による作柄の増減等により大きな変動がみられるが、トレンドとしては増加傾向にあり、その中でも 2004/05 年度以降の増加が顕著となっている。

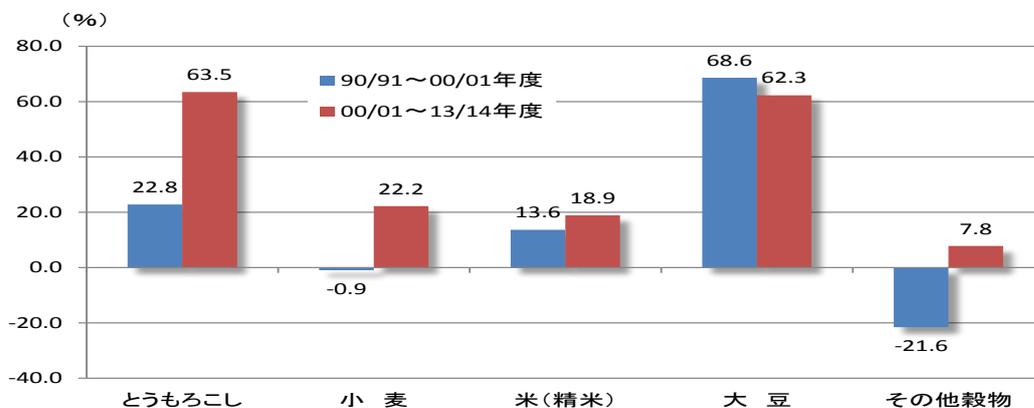
図Ⅱ－1 世界の穀物及び大豆の生産量の推移



資料:USDA「PS&D」(January 2014)をもとに、農林水産省にて作成

品目別の生産量の動きをみると、主に搾油用として用いられる大豆は、1990/91年度以降一貫して増加しているのに対して、とうもろこしは、米国のバイオ燃料への使用量義務付けや飼料用需要の増加等を受け、2000/01年度以降の伸びが大きくなっている。

図Ⅱ－2 世界の穀物及び大豆の生産量の伸び率



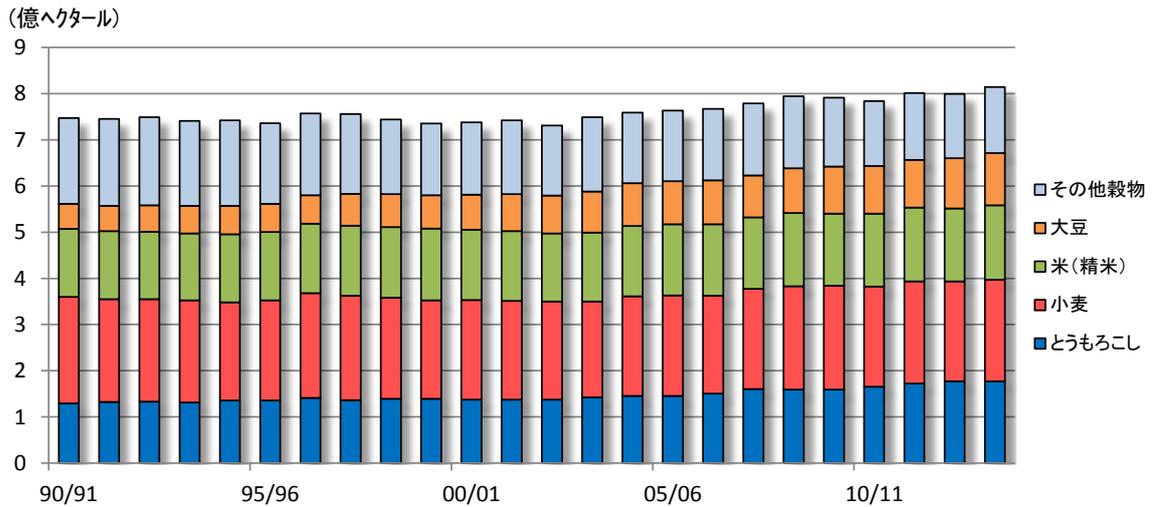
資料:USDA「PS&D」(January 2014)をもとに、農林水産省にて作成

一方、主に主食用としての用途となる小麦や米は、とうもろこしや大豆に比較して伸び率は小さく、比較的安定した生産量で推移しているとみることが出来る。

(収穫面積はほぼ横ばいだが、単収は上昇傾向)

世界全体の穀物等の収穫面積は、2013/14年度は8.2億ヘクタールとなっており、1990/91年度（7.5億ヘクタール）から8.9%増加したものの、トレンドとしてはほぼ横ばい傾向にある。

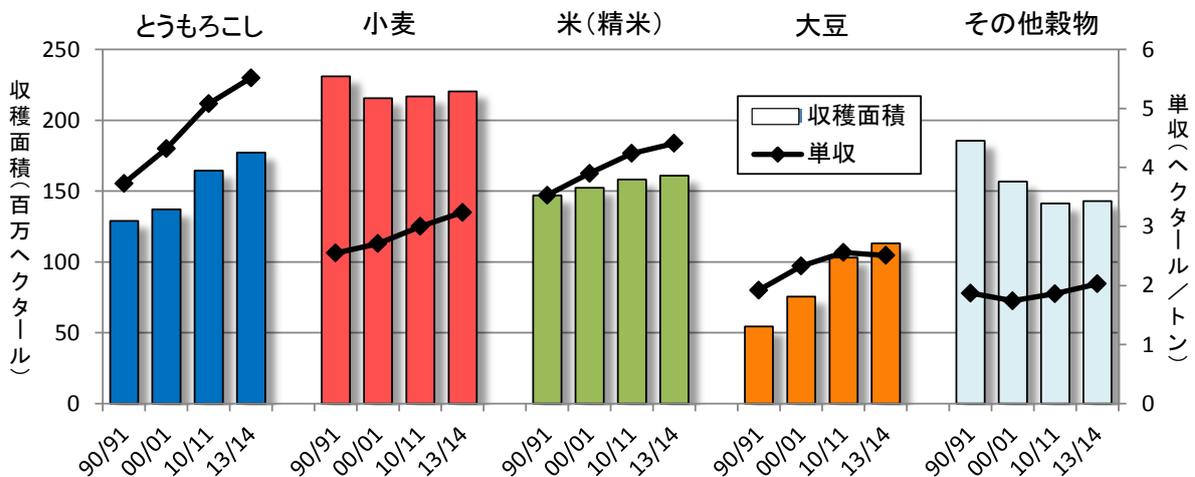
図Ⅱ－3 世界の穀物及び大豆の収穫面積の推移



資料:USDA「PS&D」(January 2014)をもとに、農林水産省にて作成

品目別の動きをみると、1990/91年度以降、とうもろこしは、収穫面積が増えるとともに単収も上昇している。小麦及び米の収穫面積はほぼ横ばいであるが、単収は一貫して上昇しており、このことが生産量の増加につながっている。一方、大豆の収穫面積は一貫して上昇しているが、2010/11年度以降の伸びは鈍化しており、単収も2010/11年度以降伸びていない。

図Ⅱ－4 世界の穀物の品目別の収穫面積・単収の推移



資料:USDA「PS&D」(January 2014)をもとに、農林水産省にて作成